



# 宮農情報

第38号 平成27年8月3日

## 「あまおう」8月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

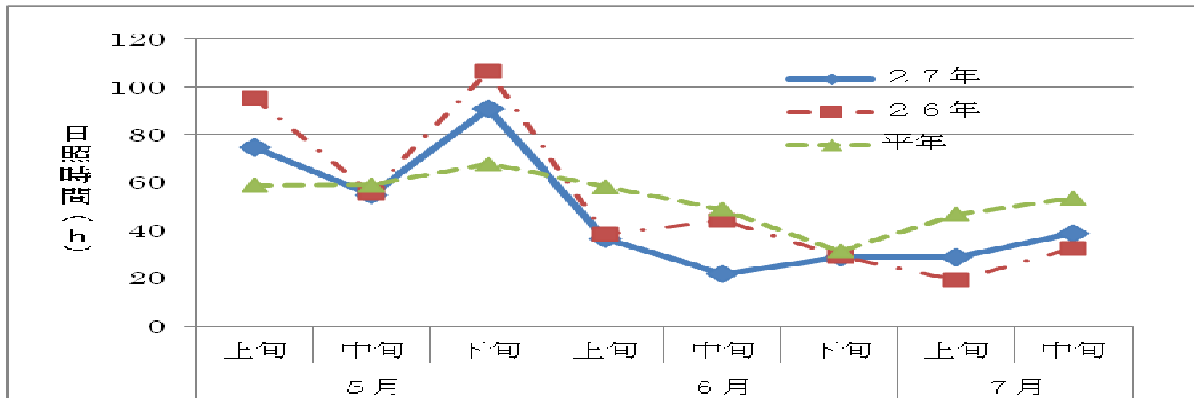
10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

- ◇ 作型に応じた充実した苗づくりを心がけましょう。
- ◇ 低温処理前には「ハダニ類」や「うどんこ病」等の防除を徹底しましょう。

今年、5月下旬の乾燥、6月の低温及び日照不足でランナーの発生が遅く、一部で根傷みの発生が見られました。また、曇天の影響で軟弱徒長気味で生育している苗が目立ちます。根傷みについては現在回復してきており、根の張りも概ね順調です。ただし、断続的な降雨のため切り離しや葉かぎが遅れて、苗がまだ小さいほ場が見受けられます。

今後は苗の状態を確認して、充実していない場合は無理に早い作型にするのではなく、遅い作型に変更などして苗の充実を図って下さい。病虫害については、「カキヒメヨコバイ」、「うどんこ病」の発生が多く見られましたが、現在は発生も少なくなってきました。しかし、梅雨明け後からは「ハダニ類」や「アブラムシ類」の発生が多くなることが予想されます。併せて「炭そ病」、「うどんこ病」の防除も徹底して下さい。

＜日照時間(アメダス久留米より)＞



## 作型と苗の管理

### 作型の選択

- クラウン径が 8 mm 未満の苗は、無理して早い作型にせず、苗の充実を優先させる。
- うどんこ病の発生が見られる苗は、遅い作型に使用する。

「あまおう」の作型別、処理期間と定植日及び収穫開始の目安

作型 (予冷库利用)	入庫	出庫	定植予定日	陽光処理	収穫開始
株冷Ⅲ型	8月20日	9月12日	9月12日～	3回	11月上旬
株冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15日～	2回	11月中旬
株冷Ⅴ型	9月1日	9月19日	9月19日～	1回	11月下旬
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日	—	11月上～中旬
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	—	11月中旬
普通ポット			9月20～25日	—	12月上～中旬
普通晩期(厳寒期安定出荷を目的)			9月26～28日	—	12月下旬

## 肥培管理

クラウン径が8mm以上に充実した苗を目標とする。

- 根傷みしている場合は追肥（置肥）を控え、根が回復するまで葉面散布を行う。
- 根傷みしている場合は、発根促進剤を施用する。
- 各作型に応じて最終追肥時期を決め、計画的な施肥を行う。（下記の表を参照）
- 育苗後半の肥料切れは、1番果房の着果数減少や早進株の発生の原因となるので、作型に合わせて極端に切れ過ぎないように注意する。

最終追肥時期の目安

作 型	3.5寸鉢	3寸鉢
夜冷（8月中下旬処理開始）	処理 10日前	処理 5日前
株冷Ⅲ型（8月20日入庫）	8月 1日	8月 5日
株冷Ⅳ型（8月23日入庫）	8月 5日	8月10日
株冷Ⅴ型（9月 1日入庫）	8月10日	8月15日
普通ポット	8月25日	8月30日

※ポットが小型になるほど、薄い濃度で間隔を短くし、肥料が切れすぎないようにする。

## かん水

- 鉢土の乾き具合を常に観察して、過湿にならないようかん水量を調整する。
- かん水は午前中を中心に行い、夕方には鉢土の表面が乾く程度にする。
- 寒冷紗を被覆すると鉢土が乾きにくくなるため、乾き具合を見てかん水を調整する。

## 葉かぎ

- 1回当たりの摘葉数は2枚以内とする。
- 葉かぎ後の苗の葉数が、2.5～3.5枚になるようにする。
- 生育が悪い時や降雨時・直前は摘葉しない。
- 葉かぎ後は、必ず「炭そ病」の防除を行う。
- 最終摘葉の後は、「ハダニ類」「ヨトウムシ類」及び「炭そ病」の防除を必ず行う。

### 【最終の摘葉時期の目安とその時の葉数】

※「うどんこ病」多発苗の場合は、うどんこ病斑がある葉がなくなるよう最終葉かぎ時期の葉数を2.5枚にする

株冷	入庫10日前に3～3.5枚
夜冷	処理開始直前に3.5枚
普通ポット	8月30日頃に3～3.5枚

### 【株冷入庫10日前の体内窒素濃度による管理】

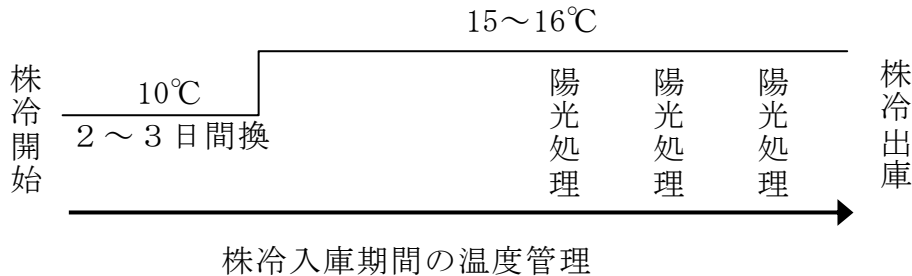
体内窒素濃度	対 策
25ppm 以下	葉面散布 2回：OKF-1 1,000倍、メリット青 500倍など
25～100ppm	葉面散布 1回：OKF-1 1,000倍、メリット青 500倍など
100～250ppm	かん水のみ
250～500ppm	P K剤の葉面散布 1～2回 入庫2～3日前に試験紙判定で100ppm以下になっているか再調査する
500ppm 以上	遅い作型に変更する

（裏面に続く）

# 花芽分化促進

## 【株冷処理】

- 株冷処理の間に苗が消耗するため、充実した苗を使用する。
- 株冷入庫時に葉柄中の窒素濃度が 25~50ppm になるよう、肥培管理を行う。
- 冷蔵庫内の湿度に注意し、湿度 90% 以上になるようにする。特に、冷風が直接当たる部分は乾きやすいので、ダンボールや厚紙で風よけをする。
- 高温年には入庫前に寒冷紗で被覆して、苗の温度を下げる対策も必要となる。



### <陽光処理>

- ☆ 株の消耗を抑えるため、入庫 15 日前後に 1 回目を行い、その後 2~3 日間隔で計 3 回程度行う。
- ☆ 晴天日に苗を庫外に出し、日光に当てる。出庫時間は 1 日 8 時間以内とし、乾燥しないようにかん水を行う。
- ☆ 再入庫は、冷蔵庫内の温度上昇を防ぐため、株の温度が下がった夕方（午後 6 時頃）に行う。

## 【夜冷処理】

- 処理期間中に肥料切れしないよう、処理開始時には適当な濃度 150ppm 程度の体内窒素を確保する。
- 入庫時の庫内温度は  $13^{\circ}\text{C} \pm 2^{\circ}\text{C}$  とする。
- 入出庫時間の目安は、午前 10 時に出庫、午後 6 時に入庫とする。
- 気温が高い場合、入庫が早いと庫内の温度が下がりにくいため、入庫時刻を遅くする。
- 処理期間中には、かん水や薬剤散布は行うが、摘葉はしない。
- 日中、極端な高温（ $35^{\circ}\text{C}$  以上）になる場合には、花芽分化が遅れることがあるので、寒冷紗による遮熱を行う。

## 【普通ポット】

- 花芽分化促進のため、8 月下旬より寒冷紗被覆を行う。ただし、うどんこ病が発生している場合は、寒冷紗被覆により通風が悪くなると発病を助長するので、通風に注意する。

# 定植床の準備

定植床の準備は、8 月中旬までに終了しておく。

## 【土壤消毒】

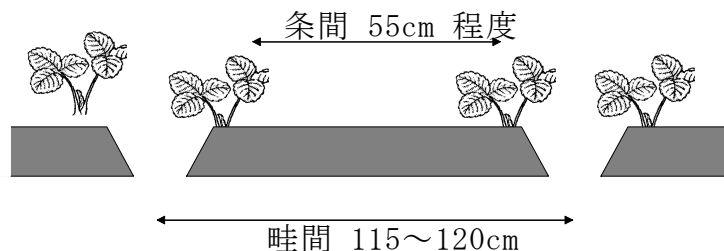
- 前年度に、「炭そ病」、「ネグサレセンチュウ」などの病害虫が発生していた場合は、薬剤による土壤消毒を行う。
- クロピクフローやクロルピクリン錠剤等の土壤消毒の際は、定植する畦づくりをした後にガス剤等を注入し、定植直前まで古ビニル等で被覆しておく。
- 太陽熱消毒や D-D 等の土壤消毒後の耕起では、土壤消毒前より深く耕さない。（未消毒の土壤が、消毒済みの土壤に混入することを避けるため）

## 基肥施用

- 2番果房の花芽分化安定対策のため、定植の早い作型ほど基肥量は少なくする。
- 作型別の基肥施用量は、部会の施肥基準に従う。

## うね作り

- うね作り後は、定植までビニルのベタがけを行う。
- うね作りの目安



## 病害虫防除

### 炭そ病

- 育苗期間中は定期的な防除を行う（防除例参照）。特に、葉かぎ前後の防除を徹底する。
- 発生株、葉に病斑を確認した株及びその周辺株をすみやかに除去する。
- 株冷の陽光処理や夜冷の日光処理中に夕立などの降雨があった場合は、葉の水滴がなくなるまで入庫しない。株冷の場合、翌日の早朝に入庫する。
- 雨よけ育苗では風通しを良くし、高温、過湿にならないようにする。

### うどんこ病

- 不要な下葉を除去した後に、薬剤散布を行う。
- うどんこ病の孢子発芽適温は20℃前後なので、うどんこ病の病斑が見られる苗は低温処理せずに作型を遅らせ、葉かぎで病斑がある葉が取り除かれてから定植する。（今年度は梅雨明けが遅く病斑が遅く残る恐れがあるので注意）

### ハダニ類

- 発生が多い場合は、葉の展開が遅れ、苗の生育が悪くなる。
- 低温処理開始までに必ず防除を行い、ハダニの発生の無い状態で入庫する。
- 葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。  
※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に影響の長い農薬を使用しないよう注意する。

### ハスモンヨトウ

- 心葉を食害するため、心葉に薬液がかかるように散布する。
- 入庫中にも食害を受けるため、入庫前に必ず防除を行う。

### ネグサレセンチュウ

【イチゴでセンチュウ剤として使用できる薬剤】

薬剤名	10a 当たり使用量	使用方法	使用時期	使用回数
ネマトリンエース粒剤	20～25 kg	全面土壌混和	定植前	1回
ラグビーMC粒剤	20 kg	全面処理土壌混和	定植前	1回

※登録内容変更に伴い、アドバンテージ粒剤はイチゴでの使用ができなくなっていますので、注意をして下さい。

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！**